

f 入舟遺跡・大川遺跡出土の泥メンコと鋳型

宮 宏明（日本どろめんこの会々員）

はじめに

1995年11月上旬、今年度の入舟遺跡の発掘調査終了間際に同遺跡のY 20Grid（図2参照）Ⅱ層の低湿地部分から泥メンコの鋳型（下図－1）1点が出土した。これまでに発掘調査によって石製鋳型が出土した事例を筆者管見の限り全く聞いたことはなかった。そもそも石製鋳型自体が現存していないようである。19世紀に余市で泥メンコを製作し、使用したという事実、この何ととも、ほのぼのとした愛らしい「北の泥メンコ」について紹介し、若干の考察を加えたい。

入舟遺跡出土の泥メンコと鋳型

図24－1は、スレート質の泥メンコの鋳型である。左が鶴、右が右三つ巴の型であろう。左の型の直径が18mm、右の型の直径が17mmで、巴の型の方が若干小さい。左右両型の下部に植物とみられる刻画があるが、これも上の型を彫り上げた際に刻画されたものであろう。全体の配置からしても、そのように理解するのが妥当である。これら上下左右4つの刻画周囲の細かな釘描き様のもの及び裏面のものは、後に描かれたもののようである。前の4つの刻画が、これらを切って彫られていないことでも理解できる。次に泥メンコとして図示した図24－2～10について説明する。2は亀をモチーフにしているようでもあるが断定できない。大川遺跡（図25）出土の30も亀をモチーフとしているが異なるものである。3は変わり捻じ梅である。大川遺跡の梅（39・40）とは、いわば「同範メンコ」であり、両遺跡の時代や性格を特定するにあたって、同じ鋳型による泥メンコが出土した意義は特筆されてよい。4は七宝をモチーフとしている家紋とみられる。大川遺跡（41・42）から同範メンコが2点出土している。5は雀をモチーフとしているようであり

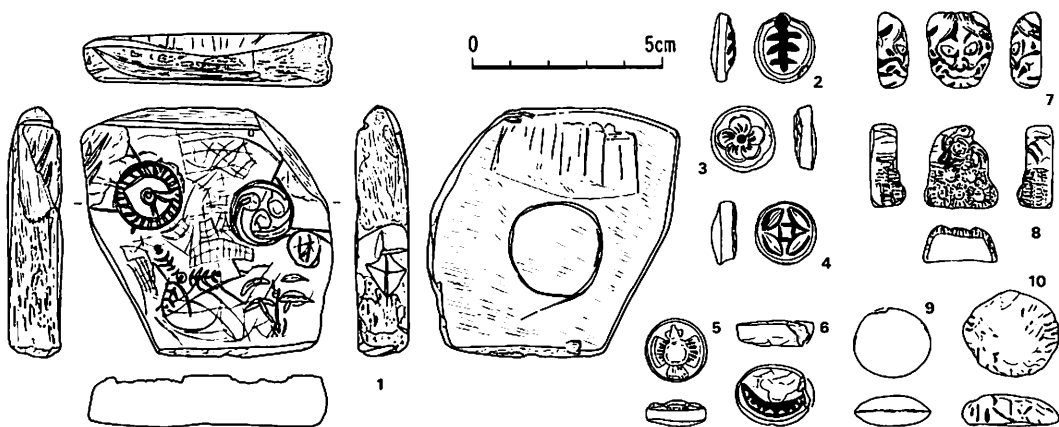


図24 入舟遺跡出土の泥メンコと鋳型（全点遺構外出土）

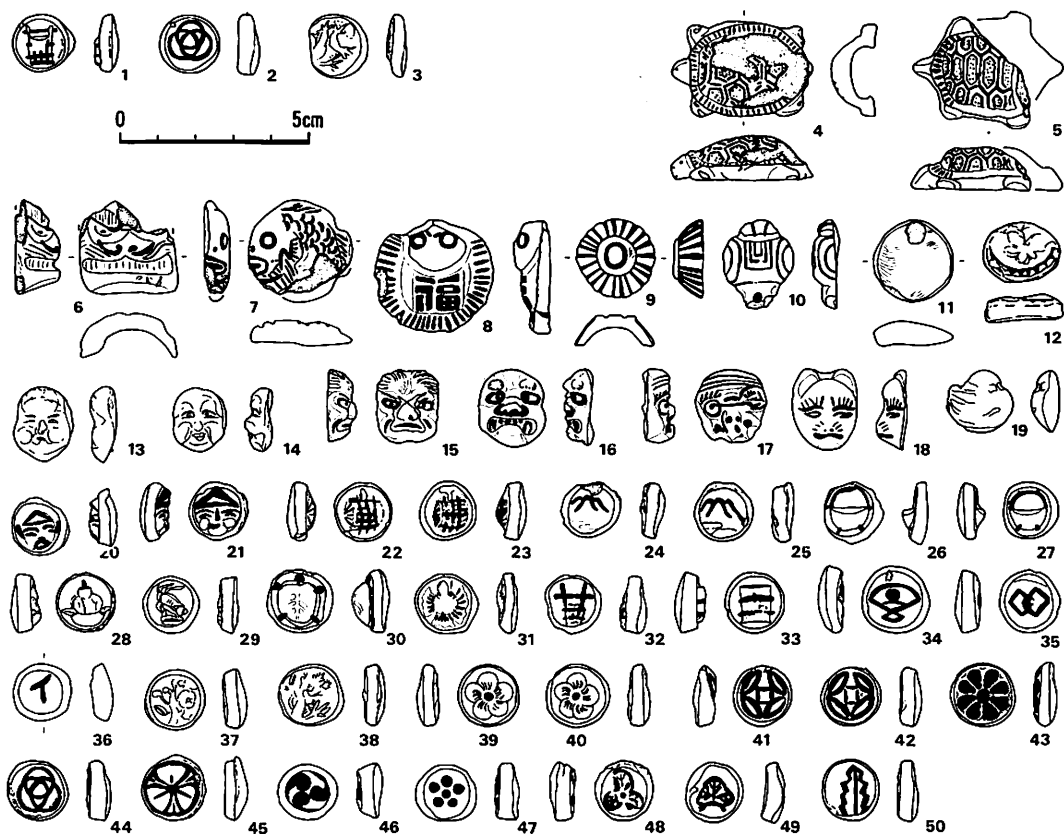


図25 大川遺跡出土の泥メンコ（1～3 SM-17、4～50 遺構外出土）

大川遺跡（31）からも1点出土していて非常に似ているが、これは同範ではないようである。6は楕円形のアワビとみられる。大川遺跡（12）からも1点同範メンコが出土している。7は鬼、8は大黒様のようなものである。非常に精巧に仕上げられている泥メンコである。9は無文で基石様、10は大川遺跡（7）の鯛と同様な泥メンコが磨滅したものである可能性がある。入舟遺跡については、1997年度にも隣接区を発掘調査する予定であり、泥メンコや鋳型の資料が増加することを期待したい。

大川遺跡出土の泥メンコ

図25-1～3は大川遺跡SM-17出土のものであり、この貝塚は明治時代に残されたものとみられる。1は手桶であろう。32も手桶のようなものであるが異なる鋳型のもののようである。2は三つ輪違いで44とはこれも同範である。3については植物かと思われるが、不明である。37・38とも若干類似するが、これらも植物であろう。磨滅が進んでいることや、そもそも凸凹が少ない泥メンコであるため判断が難しい。4・5は亀で、細部に亘って非常に良くできている。6は獅子頭、7は鯛、8は福良雀、9は茶碗様の玩具かとみられ、泥メンコには含めない方がよいのかもしれない。10は打ち出の小槌、11は基石様で無文、12は前述のとおりアワビかとみられる。13・14は、おたふく、15・16は鬼（？）、17はひょっとこ、18は狐、19は鳩かとみられる。20・21は恵比

須様とみられるが、全く異なる鋳型によるものである。22・23は同範の倭である。24・25は同範の富士山、26・27は同範の鉄鍋、28は天神様（?）、29は生き物には違いないが不明である。猿の可能性もある。30は亀、31は雀、32は手桶、33は樽、34は日の丸扇、35は違い角、36は「イ」の字、37～42（前述）、43は八つ菊、45は剣片喰、46は左三つ巴である。非常に残念なことに、入舟遺跡出土の鋳型は右三つ巴であり、大きさは対応するものの全く反対の三つ巴である。47は星梅鉢、48は三つ柏、49は光琳松、50は御幣のようである。裏がコンケイブしているもの、即ち大川遺跡の4・5・6・9は狭義には泥メンコと分類しない方が適切かもしれないが、ここでは一応含めておいた。鋳型と泥メンコのセットでの紹介を残念ながらしえなかったが、石製鋳型の国内における類例はこれまでのところ皆無のようである。入舟遺跡と大川遺跡から出土した円形の泥メンコの径は、15～17mmであり、焼成による収縮を考慮すれば焼成前は17～20mm前後であったとみられる。入舟遺跡出土の鋳型の三つ巴の径は17mmであり、大川遺跡出土の47の三つ巴の径は15mm程である。一方、関東地方等で近年多数出土している、いわゆる江戸遺跡の円形の泥メンコのレギュラーサイズは概ね20～25mm、大きなものでも30mm前後のものが多い。

総じていうならば、「北の泥メンコ」は、小振りのものが多い。しかし、相撲や歌舞伎といった華やかさはないものの、種類等については決して引けをとらない。欠けたり、壊れたりといったものが少ないところから、収集することが主目的であったようにも考えられる。

※ 家紋については、古沢恒敏編『正しい家紋帖』金園社を参考にした。



写真33 入舟遺跡出土の泥メンコ（右）と鋳型（左）

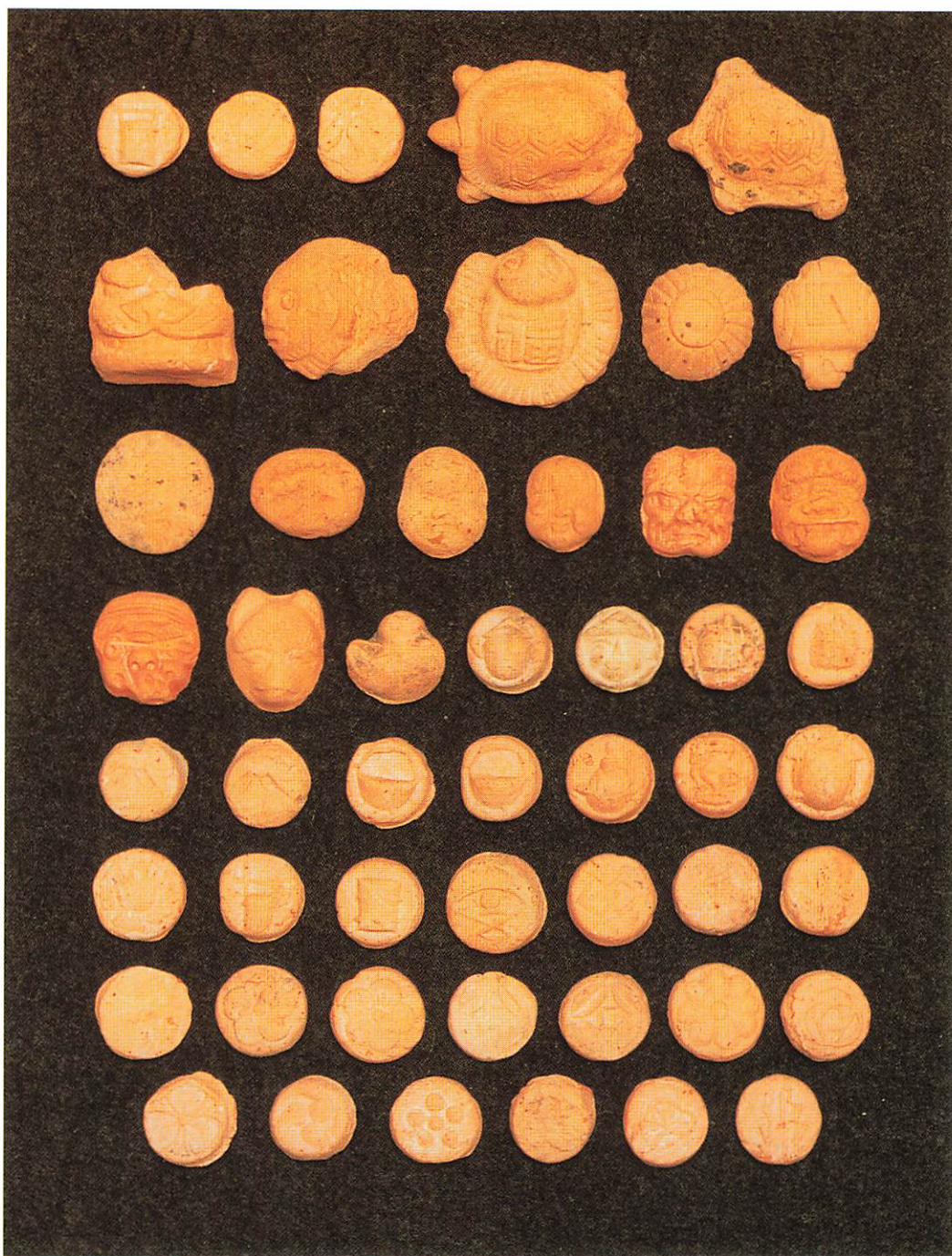


写真34 大川遺跡出土の泥メンコ